

## 第3章 事務と経営

### 第1節 事務の本来的な位置づけ

集団活動は、集まった契機に背反しないように、あるいは集まった目的を損なわないように運営していく「仕組み」を必要としている。集まった人々には、それぞれに能力の特性や行動の特性があり、いくつかのまとまりに「分類」される。その集団は、「運営の仕組み」と「人の分類」の相互作用のかたちで構造化され、結果として、設けられた運営の仕組みのある「位置」に、ある種の人が対応づけられる。

集まった人々は、「データや情報」を媒体にし、「話し合う・記録する・計算する・分類判断する」等の活動から人々の心と心を結びつけ、集まった目的を損なわないよう「運営の仕組み」と「対応づけられた位置」に筋道をつけ活動を営む。

このような活動を営むとき、

「データや情報」を媒体にし、

「話し合う・記録する・計算する・分類判断する」活動そのものを「事務」とし、

「人々の心と心を結びつけ筋道をつけ営む」ことを「経営」として位置づける。

したがって、本来「事務」や「経営」は機械的なものでなく、まさに血のかよった人間的なものとして位置づけたことになる。

また、「対応づけられた位置」とは、「運営の仕組み」における部署にあたり、「仕組み」として系統化された機能（目的）を分掌と呼ぶことができる。ある位置に対応づけられた者には、その位置がもつ機能を充足させるべく一連の行動様式が期待される。「位置に対応して、存在する行動様式」を「役割」とおさえる。

学校事務に置き換えてみるとどうなるだろうか。このような考えは学校事務においても例外なくあてはまる。

### 第2節 事務と管理

事務とは、組織体が多くの人間を必要とし、これを組織化する必要がおこり、それによって生じている。事務は必ず集団の中で行われ、目的を達成する手段として活用される性質をもっている。したがって、事務は、「組織の目的を達成するために、組織内の各個人が与えられた役割を果たし、相互の協力を図るための手段としての活動」といえる。

管理とは、組織化された組織体に秩序と統制の必要がおこったときに生じ、事務と同じ性質をもちつつ、「組織の目的を達成するために、組織内の各個人が与えられた役割、特に、縦と横との分業活動に秩序と統制を与える手段としての活動」といえる。

組織によって事務が生じ、必然的に「組織の事務化」が伴い、組織の秩序と維持の必要が生じ、「管理事務」を成立させる。さらに「管理事務の事務化」が要請されるようになり、「事務管理」の成立をみることになる。組織規模が大きくなり複雑になるにつれ、集団の構成員の能力や行動の特性の分化が高度に進み、専門的部門の成立や責任と権限の明確化を生じさせる結果となっている。

社会関係が高度に成長してきている現在、組織の秩序の維持に向け、統制としての管理が重要な役割を示している。このことが、前段で述べた事務の本来的な位置づけを建前にし、それが事務の非人間的な評価を生み、管理事務が事務であるといったような矮小化された認識をもちやすい状況を日常的に生みだしている。事務活動は、これらのことを踏まえつつ、事務の本来的な位置づけを念頭に置きながら、人々の心と心を結びつけ締め括る活動として、意識的に構築しなければならない。

### 第3節 経営と事務

経営とは、「組織の目的を達成するために、組織内の各個人が与えられた役割、特に、縦と横との分業活動の中で、心と心を結びつけるなどの人間的関係を築きながら、合意を形成していくための筋道をつけた営み」そのものである。

つまり、管理が法的規制等による遵法的な運営の局面であるのに対し、経営は、組織におけるリーダーシップやコミュニケーションによる合意の形成等、人間的な関係の要因を取り上げながら、活動と活動のための条件について、心理学的、社会学的、行動科学的な事ながらに目を向けた運営の局面である。経営的な思考においては、管理者の指揮や監督等の管理行為が姿をかえ、指導や助言として機能することになる。

関係が高度に成長した組織において、経営と事務は表裏一体の関係にある。例えば、経営目的の達成のためには、組織内の各個人が与えられた役割を果たし、組織内の相互の協力を図らなければならない。その手段として、外的・内的な「データと情報」の蓄積が必要となり、「データや情報」を媒体にした「話し合う・記録する・計算する・分類判断する」活動＝事務活動が重要となる。つまり、事務は、経営目的達成に向けた課題解決等に重要な局面を与えるものであり、経営において中核的な役割を果たし、切り離すことのできないものである。